

認知症のおばあちゃん

音羽中・1 後田 花音

私たちには、誰にでも「寿命」があって、時が経てば当然、人は年をとっていく。その中で、病気になってしまいう高齢者は、決して少なくはない。

私のおばあちゃんは、私の家の隣に住んでいる。そして、おばあちゃんは「認知症」という病気にかかっている。「認知症」とは、毎年多くの高齢者がかかっている病気、よくテレビでも取り上げられている。調べてみると、日本は現在、超高齢社会と言われており、六十五歳以上の高齢者のうち、十五パーセントの人が認知症を患っているらしい。二〇二五年には、高齢者の二十パーセントが認知症になると言われている。だから、あまり珍しくはない身近な病気である。

認知症には、さまざまな種類があるけれど、脳の病気だと私の父さんから聞いた。簡単に言うくと、脳が元々のサイズからどんどん小さくなっていてしまい、物の名前が分からなくなったり、一人で行けることがなくなっていてしまったりする病気らしい。私はそれを聞いて、

「赤ちゃんのような。成長して大人になったのに、どうして赤ちゃんと戻るんだろう。認知症になった人はみんな赤ちゃんのようになってしまうのかな。認知症ってそんなに怖いものなんだ。」

昔おばあちゃんには、私が小学校一年生から三年生の間は、よく遊んでもらっていた。かくれんぼをして遊ぶことが多かった。その時のおばあちゃんは、まだ物の名前もちゃんと分かっていたけれど、私がおばあちゃんの家に入ると、

「どこの子が来たかな。」

と面白半分によく言っていた。その言葉を聞くと、私は、笑ってその言葉に冗談を返していた。家族もいともこの言葉を面白がって聞いていた。私のおばあちゃんは、本当に面白いと思っていた。けれど、時々、おばあちゃんのこの冗談が怖いと感じるときがあった。

おばあちゃんが認知症になったのは、私が小学校三年生後半の頃だった。その時は、コロナが流行って、休校になった時期で、私は学校に行けず、外にも出かけられなかったのも、おばあちゃんの家に行くこともできなかった。それから、しばらくして、コロナが少し収まって、外に出られるようになってきた頃には、おばあちゃんはまだ認知症になっていた。

「どうしておばあちゃんは認知症になったの。」

と、私がお父さんとお母さんに聞くと、

「コロナで人と会うことができなくなって、おしゃべりすることが減って、物の名前や人の名前を忘れてしまったんだよ。」

と言われた。その言葉を聞いて、私は悲しくなってしまった。

「おばあちゃんは、もう私のことが分からない。」

その言葉だけがずっと頭の中に浮かんままになってしまった。

認知症は治らないし、薬は開発されているみたいだけれど、それは認知症にならないように予防する薬で、その薬ができるのは二、三年後ということだった。

認知症だと分かっていたからのおばあちゃんは、たまに一人で外に出ていくことがあった。声をかけても、おばあちゃんが何を言っているか分からなくて、私たちはとても心配していた。そこで、おじいちゃんと話し合い、週に四日デイサービスという所におばあちゃんを連れていくことにした。デイサービスとは、昼間に行く施設で、一人ですることが難しくなってしまうたご飯を食べたり、お風呂に入ったりすることをサポートしてくれるものらしい。午前中にデイ

サービスに出かけて、午後になると帰ってくるというのがおばあちゃんの新しい生活のルーティーンになった。

私は、おばあちゃんがデイサービスに行くことで、笑顔で楽しく過ごせて、認知症が少しでも良くなるのだと思っていた。でも、認知症は良くなることはなく、どんどんひどくなっていった。

そんな生活が続き、私が中学一年になった頃、おばあちゃんが施設に入るようになったと言われた。私はとてもびっくりした。おばあちゃんはデイサービスに行っているから、それ以外の時間はこれからもずっと家に居ると思っていたのに、急に施設に行くと言われたからだ。悲しい気持ちでいっぱいだったけれど、そうするしかないのだということも理解できた。

施設へ行く日の前日、おばあちゃんと一緒にみんなでご飯を食べることになった。私は最後に自分のカメラでおばあちゃんを撮っておくことにした。ご飯を食べているときに、おばあちゃんが

「花音ちゃん」

と私の名前を言いかけた。みんなびっくりしていた。でも、私はとてもとても嬉しかった。おばあちゃんは、まだ私のことを覚えてくれていた。この日のことを私は今でもはつきりと思い出すことができる。これからも忘れないだろう。

おばあちゃんが施設に入る日、私は学校があったのでお見送りはできなかった。学校に行っている間、おばあちゃんのことを気になつてたまらなかった。どんなふうに行くんだろう。寂しくなったり、悲しくなったりしてしまわないかな。不安な気持ちが強かった。

家に帰ると、お母さんがすぐにその時の様子を教えてくれた。

「しっかり行ったよ。」

すごく安心した。これからは、おばあちゃんの所へ行つて、おばあちゃんが施設の人と仲良く楽しく過ごせているか、おばあちゃんの顔色はいいか、元気にしているかしっかり見てあげたい。おじいちゃんは、おばあちゃんがいなくて寂しいだろうから、お家に行った

り、一緒にお話したりして支えてあげたい。